



# 上位最大10チームに鈴鹿8耐への出場権が与えられる 「8耐トライアウトFinalステージ」も盛り上がった第2戦

4月8日(土)、9日(日)に開幕した今シーズンの鈴鹿サンデーロードレース。約1か月半のインターバルを経て第2戦が、春の快晴の下で開催された。今回も舞台はフルコース。全カテゴリーの公式予選とCBR250R／CBR250RR Dream Cupの決勝レースが土曜日に行われ、翌日曜日にそれら以外の決勝レースが行われる2DAYS大会として開催された。

日曜日の見どころのひとつとなったのが、インターJSB1000で鈴鹿8耐の選考レース「8耐トライアウトFinalステージ」が同時開催されたことだった。上位最大10チームに“コカ・コーラ”鈴鹿8時間耐久ロードレース第44回大会への出場権が与えられるということで、45台と多くのライダー・チームが参戦。その中から1台のみが予選落ちとなり、44台が決勝レースに進んだ。通常は、インターST1000と混走レースとなるが、今回は単独レースとして開催されたこともトピックだった。

このカテゴリーは国際ライセンスホルダーがメーカーのフラッグシップのパワーを存分に引き出して激しいバトルを展開するため、ただでさえ注目度が高いが、今回は是が非でもトライアウトを通過すべく、複数台で参戦したチームやいつもは別カテゴリーで活躍を見せる有力選手にその運命を委ねるチームもあり、予選から決勝レースまで激しい攻防戦が披露された。

開幕戦に55台が参戦したナショナルST600は、今回はなんと60台が参戦。予選はA・Bの2グループにわけて行われ、決勝レースは44台のフルグリッドで開催された。このカテゴリーでも予選から激しいタイムアタック合戦が展開され、激戦が予想された決勝レースでもレース中盤まで熱いバトルが披露された。

その他、ST600R (Revival) にも21台が参戦。このカテゴリーは今シーズンが最終開催年だけに、最後のチャンピオンとなるべく、各選手がしのぎを削った。

次戦は鈴鹿8耐の1ヶ月後、9月9日(土)・10日(日)に開催される第3戦。まだまだ暑い時期が続くであろうこの日の熱いバトルにも是非ご期待いただきたい。



インターJSB1000と同時開催された「8耐トライアウトFinalステージ」「TRY OUT」のステッカーが貼られたマシンが公式予選コースイン直前、ピットレーンに並ぶ

### ■CBR250R Dream Cup

開幕戦ウィナーの大田雅裕がポールポジションを獲得。その大田が絶妙なクラッチミートを披露するが、ホールショットを奪ったのは3番グリッドスタートの秀崎隆だった。それに2番グリッドスタートの戸高綸太郎、大田と続く。大田がシケインでオーバーラン。林規夫、戸高、堀絢仁、山根顕、金田博行、秀崎のオーダーでオープニングラップを終了する。一時的に12番手まで順位を落とした大田が2周目終了時点で7番手まで順位を回復。大田は5番手で3周目を終えると、さらにペースアップして金田と林をパスする。堀をパスして2番手となった大田だが、6周目には堀が逆転。そのバトルの間に単独状態となった戸高がトップチェッカー。ファイナルラップまで続いた堀と大田のバトルは大田が制することとなった。



CBR250R Dream Cup表彰式(優勝:戸高綸太郎、2位:大田雅裕、3位:堀絢仁)

### ■CBR250RR Dream Cup

田中直哉が予選でコースレコードを1秒以上短縮する2分32秒483をマーク。ポールポジションからスタートしたその田中が良いクラッチミートを披露すると、オープニングラップから早くも後方を引き離しにかかる。それに2番グリッドスタートの細谷匠、5番グリッドスタートの福井宏至と続く。福井が細谷をパスするが、すぐに細谷が2番手に。田中、細谷、福井、3番グリッドスタートの岩月寿樹のオーダーでオープニングラップを帰ってくる。単独走行を続ける田中の若干後方で細谷も単独2番手に。福井をパスした岩月が3番手に浮上すると、次第に岩月も単独3番手となる。ファステストラップをマークしながら走行を続けた田中が2位以降に9秒257ものアドバンテージを築き、堂々のポールtoウィンを決めた。



CBR250RR Dream Cup表彰式(優勝:田中直哉、2位:細谷匠、3位:岩月寿樹)

■インター／ナショナルJP250

ポールポジションスタートの中川涼と2番グリッドスタートの前田誠司が横並び状態で1コーナーへ。しかし、逆バンクで転倒したマシンが複数台あったことにより、赤旗が出されてレースは中断。リスタート後も中川と前田が横並びでスタートすると、前田が前に。その後に中川、南博之をパスした福井宏至と続く。福井は中川をもパス。前田、福井、中川、藤田武蔵のオーダーに。福井はさらに前田をパスしてトップに立つが、すぐに前田がトップを奪還する。福井、前田、南、中川、藤田、三浦雄一がトップグループを形成。その中で福井と南が積極的な走りを披露する。前田と福井を一気にパスした中川を先頭にファイナルラップに突入するが、1コーナーでは南がトップに。しかし総合優勝を決めたのは前田だった。



インターJP250表彰式(優勝:中川涼、2位:船田俊希、3位:辻本範行)



ナショナルJP250表彰式(優勝:前田誠司、2位:福井宏至、3位:藤田武蔵)



ナショナルJP250車両銘柄賞表彰式(Honda賞:前田誠司、ヤマハ賞:大窪証文、カワサキ賞:松田洋)

■インター／ナショナルJ-GP3／  
HRC NSF250R Challenge

高橋直輝が予選で2番手以降を1秒371引き離すタイムをマーク。ポールポジションを獲得したその高橋が良いクラッチミートを披露するが、2番グリッドスタートの松田基成がホールショットを奪う。高橋は逆バンクで松田をパスしてトップに。その2台がオープニングラップから後続を引き離しにかかる。それに続くのは3番グリッドスタートの岡田陽大。高橋、松田、岡田のオーダーでオープニングラップを終了すると、高橋は松田を若干引き離すことに成功。松田からさらに若干離れ、村田憲彦、岡田、保坂洋佑、仲村瑛冬が3番手グループを形成する。再びテールtoノーズの状態になった高橋と松田だが、松田がトップチェッカーを受け、インターJ-GP3のウィナーに。総合3位の岡田がナショナルJ-GP3を制した。



インターJ-GP3表彰式 (優勝: 松田基成、2位: 高橋直輝、3位: 村田憲彦)



ナショナルJ-GP3表彰式 (優勝: 岡田陽大、2位: 保坂洋佑、3位: 竹本倫太郎)

■インターJSB1000/  
「8耐トライアウトFinalステージ」

前回のウィナーである加藤高史がポールポジションからスタート。その加藤がホールショットを奪うと、オープニングラップから後続を引き離しにかかる。加藤、2番グリッドスタートの山中将基、6番グリッドスタートの中島陽向のオーダーでオープニングラップを終了。そこから若干離れ、3番グリッドスタートの遠藤晃慶が続く。しかし、2周目の2輪専用シケインで転倒したマシンが複数台あったことにより、赤旗が出されてレースは中断。リスタート後も加藤が良いスタートを決めることに成功。それに山中、中島と続く。中島をパスした奥田貴哉が山中をもパス。奥田はトップ加藤にも接近していくが、山中がシケインで奥田と接触してその2台が転倒。単独状態となった加藤がポールtoウィンで2勝目を飾った。



インターJSB1000表彰式(優勝:加藤高史、2位:中島陽向、3位:羽根巧)

■インターST1000

2番グリッドスタートの高田速人が出遅れる。ホールショットを奪ったのはポールポジションスタートの澤村元章。それに4番グリッドスタートの山添康孝、10番グリッドスタートの花村峻と続く。花村が山添をパスして2番手に。澤村、花村、山添のオーダーでオープニングラップを帰ってくる。澤村はその時点で花村以降に1秒079のアドバンテージを築くことに成功。花村、山添も単独2番手、単独3番手となる。野島由晶が山添に接近するとこれをパス。野島は花村のテールをも捉える。越智健仁と吉原匡徳も山添をパスし、越智が4番手、吉原が5番手に。越智をパスした吉原が6周目のデグナーでオーバーランして転倒。8周目に複数台が転倒したことにより、赤旗が出されてレースは終了。澤村の優勝が決まった。



インターST1000表彰式(優勝:澤村元章、2位:花村峻一、3位:羽野慎一)

■ナショナルST1000

前回のウィナーである中尾泰三が予選で後続に1秒517の大差を付ける好タイムをマーク。ポールポジションからスタートした中尾の横から2番グリッドスタートの池田寛之が加速していく。それに続くのは6番グリッドスタートの村田司。池田はオープニングラップから早くも後続を引き離しにかかる。池田、村田、中尾のオーダーでオープニングラップを終了。その3台はそれぞれ単独走行となるが、中尾が再び村田に接近し、3周目の1コーナーでこれをパスする。村田がミスしたことにより、樽見隼が3番手に。中尾の後方で池田、樽見、村田がテールtoノーズのバトルを展開する。ファイナルラップでファステストラップをマークした樽見が中尾に接近。しかし、トップの座を守った中尾が2連勝を飾る結果となった。



ナショナルST1000表彰式(優勝:中尾泰三、2位:樽見隼、3位:池田寛之)

### ■インターST600

開幕戦のウィナーである塚原溪介が予選開始早々に転倒。タイム計測できず、予選不通過という波乱の幕開けに。ホールショットを奪ったのはポールポジションスタートの中村敬司。2番グリッドスタートの村瀬豊、3番グリッドスタートの鈴木慎吾が横並びで続く。中村は後続を引き離しにかかり、2番手を走る村瀬に1秒664のアドバンテージを築いてオープニングラップを終了。村瀬は単独2番手に。鈴木も単独3番手となる。そこから若干離れ、Kavin Quintalと福田琢巳が4番手争いを展開。福田を引き離したQuintalは鈴木に接近する。中村は周回ごとに後続を引き離し続け、トップの座を盤石なものに。一度もトップの座を明け渡すことなく、中村が2位の村瀬に16秒255ものアドバンテージを築いて優勝を果たした。



インターST600表彰式(優勝:中村敬司、2位:村瀬豊、3位:鈴木慎吾)

### ■ナショナルST600

4番グリッドスタートの川本宜論が絶妙なクラッチミートを披露するが、2番グリッドスタートの平城雄飛がトップでレースを引っ張る。それに続くのは川本、5番グリッドスタート岡村建のオーダー。ポールポジションスタートの中堀拓己は出遅れる。平城、川本、岡村、3番グリッドスタートの大中真次、中堀、9番グリッドスタートの西山尚吾と続いてオープニングラップを終了。3周目になると平城と川本が後続を引き離してテールtoノーズのバトルを展開する。その2台は周回ごとにファステストラップを塗り替える好走を披露。岡本は単独3番手に。大中をパスした中堀はその岡村にも接近し、一時的にこれをパスする。川本は8周目に満を持して平城をパスするが、平城がすぐにトップに戻り咲いて優勝を決めた。



ナショナルST600表彰式(優勝:平城雄飛、2位:川本宜論、3位:岡村建)

### ■ST600R (Revival)

2番グリッドスタートの森本光哉が良いクラッチミートを披露するが、ホールショットを奪ったのはポールポジションスタートの中出敏克。それに4番グリッドスタートの芝本友暉が続く。中出、芝本、森本、昨年チャンピオンの小松孝章のオーダーでオープニングラップを終了。中出は集団を抜け出すことに成功する。その若干後方で芝本と森本がテールtoノーズのバトルを展開。5番手を走る山口直哉が4周目の1コーナーで転倒し、徐々にトップグループがばらけ始める。中出は4周目に予選を上回る2分20秒690をマークし、さらに後続との差を広げるが、6周目になると森本と芝本がその中出に再び接近。3台がテールtoノーズのバトルを披露する。中出が8周目のシケインでミス。森本がトップチェッカーをかけた。



ST600R (Revival) 表彰式(優勝:森本光哉、2位:芝本友暉、3位:中出敏克)

**Voice  
of  
Pick up  
Riders**  
-SUNDAY EDITION-  
この日、キラリと光った  
ライダーに一问一答

この日、キラリと光ったライダーに一问一答  
「Voice of Pick up Rider -SUNDAY EDITION-」

ST600R (Revival) で優勝した

**森本 光哉** 選手

(M-factory racing & SS'MOCHIZUKA / ヤマハYZF-R6)



**Q. 公式予選では2番手タイムをマークしましたね。どのような予選でしたか。**

A. 実は特別スポーツ走行から予選まで調子が良くありませんでした。なぜ不調なのか理由がわからないまま終わってしまいました。決勝レースは気持ちを切り替えて戦おうと思いました。

**Q. 決勝レースでは終盤にトップに立つと、そのままトップチェッカーを受けましたね。**

A. 夢中で走っていたら前の選手がミスをして、トップに立てました。チェッカーを受けた後、気が緩み、転んでしまいました。ファイナルラップでファステストをマークできたことはレース後に知りました。

**Q. ST600R (Revival) は今シーズンが最後ですね。残りの2戦をどのように戦いますか。**

A. 今年はナショナルST600にもエントリーしています。残りの2戦も今回と同じくナショナルST600とこのクラスにダブルエントリーする予定です。ST600R (Revival) ではコースレコードを更新し、チャンピオンを獲得したいです。